

# 一角仙人

禪鳳作

季は	地は	ワキ	官人
秋九月	天竺	シテ	一角仙人
		ツレ	旋陀夫人

「是は天竺波羅奈国の帝王に仕へ奉る臣下なり。さても此國の傍に一人の仙人あり。鹿の胎内に宿り出生せし故により。額に角一つ生ひ出でたり。是に依つて其名を一角仙人と名づく。さる子細有つて龍神と威を争ひ。仙人神通を以て諸龍を悉く岩屋の内に封じこむる間。数月雨下らず候。帝此事を歎き給ひ。色々の御方便をめぐらし給ひ候。こゝに旋陀夫人とてならびなき美人の御座候ふを。踏み迷ひたる旅人の如くにして。仙境に分け入り給はゞ。夫人に心を移し。神通を失ふ事も有るべきとの御方便により。夫人を具し奉り。唯今彼山路に分け入り候。

ワキ一声  
「山遠うしては雲行客の跡を埋み。松寒うしては風旅人の。夢をも破る仮寝かや。

道行  
「露時雨。漏る山陰の下紅葉。く。色添ふ秋の風までも。身にしみまさる旅衣。霧間を凌ぎ雲を

分け。たづきも知らぬ山中に。おぼつかなくも踏

み迷ふ。道の行方は如何ならん。く。

ワキ詞

「日を重ねて急ぎ候ふ程に。何処とも知らぬ山路に分け迷ひ候ふぞや。こゝに怪しき巖の陰より。吹き来る風のかうばしく。松桂の枝を引き結びたる菴あり。若し彼仙境にてもや候ふらん。暫く此あたりに徘徊し。事の由を窺はゞやと思ひ候。

シテサシ

「瓶には谷漣一滴の水を納め。鼎には青山数片の雲

を煎ず。曲終へて人見えず。江上数峰青かりし。  
梢も今は紅の。秋の氣色は面白や。

ワキ詞

「如何に此菴の内へ申すべき事の候。

シテ  
「不思議やこゝは高山重畳として。人倫通はぬ所なり。そも御身は如何なる者ぞ。

ワキ  
「是は唯山路に踏み迷ひたる旅人なるが。日もやうく暮れかゝり前後を忘じて候。一夜の宿を御かし候へ。

シテ「さればこそ人間の交りあるべき所ならず。とく  
く帰り給へとよ。

ワキ「そもそも人間の交りなきとは。さては天仙の住家やら  
ん。先々姿を見せ給へ。

シテ「此上は恥かしながら我姿。旅人にまみえ申さん  
と。

地「柴の扉を推し開き。く。立ち出づる其姿。緑の  
髪も生ひ上る。牡鹿の角の束の間も。仙人を。今  
見る事ぞ不思議なる。

「唯今思ひ出だして候。これは承り及びたる一角仙  
人にて御座候ふか。

シテ「さん候是こそ一角と申す仙人にて候。さてさてめ  
んくを見申せば。世の常の旅人に非ず。さも美  
しき宮女のかたち。桂の黛羅綾の衣。更に唯人と  
は見え給はず候。是は如何なる人にてましますぞ。  
「さきに申す如く。踏み迷ひたる旅人にて候。旅の

ワキ

疲の慰みに。酒を持ちて候ふ一つ聞し召され候へ。

シテ  
「いや仙境には松の葉をすき。苔を身に着て桂の露を嘗め。年経れども不老不死の此身なり。酒を用ふる事有るまじ。」

ワキ  
「尤仰はさる御事なれども。唯志を受け給へと。夫人は酌に立ち給ひ。仙人に酒を進むれば。

シテ  
「實に志を知らざらんは。鬼畜には猶劣るべしと。

地  
「夕べの月の盃を。く。受くる其身も山人の。折

る袖匂ふ菊の露。うち払ふにも千代は経ぬべき。  
契は今日ぞ始めなる。

夫人  
「面白や盃の。」

地  
「面白や盃の。めぐる光も照り添ふや。紅葉重の袂を。共に翻しひるがへす。舞楽の曲ぞおもしろき。

(樂)

地  
「糸竹の調べとりぐに。く。さす盃も度々めぐれば。夫人の情に心を移し。仙人は次第に足弱車

の。めぐるもたゞよふ。舞の袂を片しき臥せば。

夫人は悦び官人を引き連れ。遙々なりし山路を凌ぎ。帝都に帰らせ給ひけり。

地「かゝりければ岩屋の内しきりに鳴動して。天地も響くばかりなり。

シテ「あら不思議や思はずも。人の情の盃に。酔ひ伏したりし其隙に。龍神を封じこめ置きし。岩屋の俄に鳴動するは。何の故にて有るやらん。

龍神  
「如何にやいかに一角仙人。人間に交り心を迷はし。無明の酒に酔ひ伏して。通力を失ふ天罰の。報いの程を思ひ知れ。

地「山風あらく吹き落ちて。く。空かき雲り。岩屋も俄にゆるぐと見えしが。磐石四方に破れ碎けて。諸龍の姿は顯れたり。

シテ「其時仙人驚きさわぎ。

地「其時仙人驚きさわぎ。利剣をおつ取り立ち向へば。

龍王は嗔恚の甲冑を帶し。邪見の剣の刃先を揃へ。  
一時が程は戦ひけるが。仙人神通の力も尽きて。  
次第に弱り倒れ臥せば。龍王よろこび雲を穿ち。  
雷鳴稻妻天地に満ちて。大雨を降らし洪水を出だ  
して。立つ白波に飛び移り。立つ白波に飛び移つ  
て。又龍宮にぞ帰りける。